

第7回考古天文学会議(2023年12月24日)

南西諸島の暮らしと星

—星名伝承の研究黎明期と現在・多良間のニ—りの星名同定—

北尾浩一

1 はじめに

南西諸島、即ち、九州と台湾の間に約1200キロにわたり連なる島を対象にして、その空間軸のなかで生きてきた人びとと星のかかわりを論じていく。



具体的には、次のような切り口から研究を進める。

- (1) 人びとが、日々の暮らしのなかで形成した星の名前
- (2) 人びとが、日々の暮らしのなかで形成した星の歌(ユンタ、ニーリ、アーグ等)
- (3) 人びとの祈りのなかでの星。(例 アガリミチブシ、シニグ)
- (4) 人びとの年中行事のなかでの星。(例 七夕、綱引き等)
- (5) 人びとの建造物のなかでの星。(例 石垣島、竹富島の星見石。宮古島の星見石を疑う立石。久米島の太陽石等)
- (6) 星見様(久米島、多良間島、波照間島)

本稿では、上記（１）～（３）

- （１）日々の暮らしのなかで形成した星名
- （２）日々の暮らしのなかで形成した星の歌
- （３）祈りのなかでの星

の研究の黎明期におけるニコライ・A・ネフスキーとシャルル・アグノエルの調査研究を押さえた上で、いままでに実施した現地調査、アンケート調査をもとに論じていく。



◎ニコライ・A・ネフスキー

1892年(明治25年)、モスクワの北方約250キロにあるヴォルガ河岸のヤロスラヴリに生まれる。1919年(大正8年)～小樽高等商業学校(現 小樽商科大学)のロシア語講師のとき、宮古語の研究に取り組んだ。宮古語を稲村賢敷より学び、1922年(大正11年)、稲村賢敷と宮古島を調査。(写真左、宮古島のネフスキー記念碑)

◎シャルル・アグノエル

1896年(明治29年)、フランスに生まれる。1930年(昭和5年)3月4日～4月12日、首里市、那覇市、糸満町等にて調査を実施。(金城善2014)



2 星名伝承形成の地理的条件と特徴

(1) 見上げなくても目の前に北極星(ニヌファブシ)を見ることができる

最北端の高度は、最南端の倍近くになる。

沖縄本島以南では25度前後、首を曲げて見上げなくてもよい。目の前に北極星が見えているという星空景観になる。

(2) プレアデス星団がほぼ天頂を通過する

(3) 北斗七星のすべての星が周極星にならない

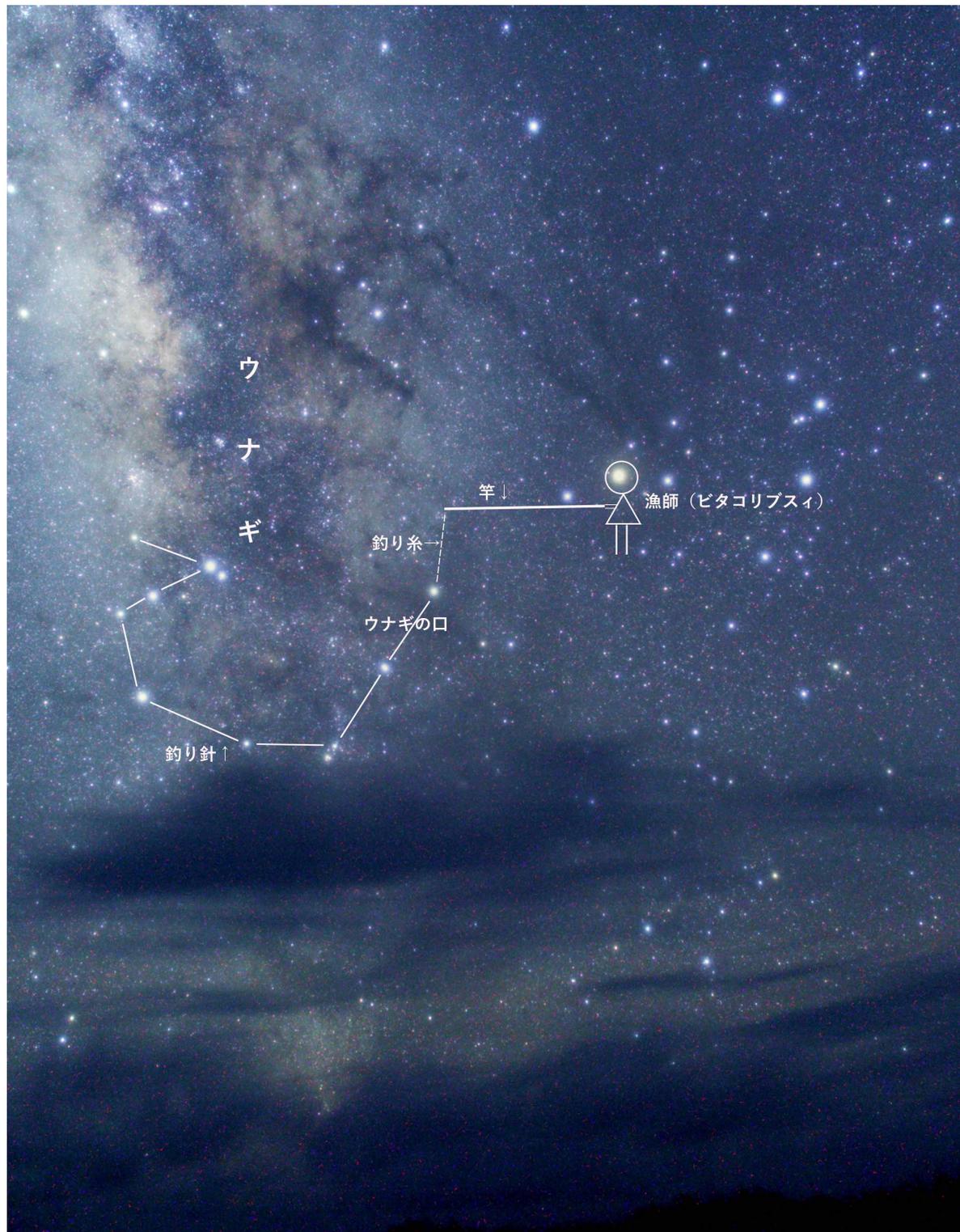
(奄美大島の北部では α 星のみ周極星になる)

(4) カノープスについて多様で豊かな星名形成がされない

(水平線ぎりぎりではなく、横着星と呼ばれるような見え方をしなくなる)

(5) 星、そして暗黒星雲に暮らしを描く

星と星をつないで生活道具を描いた。さらには、波照間島のビタコリブスイのように暗黒星雲(天の川の黒い部分)にウナギを描いた。星の輝かないところも観察し語った。(北尾2021)



ビタコリブスイ

(さそり座アンタレス)

(酔っぱらい星)

波照間島

アンタレス: 釣り竿を持ってウナギを釣る漁師。赤いのはお酒を飲んで顔を赤らめているから。

釣り針あたりの暗黒星雲即ちウナギの口へと釣り糸を垂らしている。

(新城勝氏より)

写真、波照間にて岡村修氏撮影

3 沖縄の星名伝承研究の黎明期

(1) ロシア人言語学者ニコライ・A・ネフスキー

ニコライ・A・ネフスキーは、1922年(大正11年)、1926年(大正15年)、1928年(昭和3年)の3回に渡り宮古島を調査し、数多くの星名、アーク、トーガニを記録した。

i) 星名

ニコライ・A・ネフスキー著、平良市教育委員会編『宮古方言ノート上』(平良市教育委員会, 2005)

・ビキラブス *bikir' a-busi* 男子星ノ意。牽牛星。 *biki-r' a:* 男子 p113(宮古島平良、伊良部島佐良浜)

・ブナラブス *bunar' a-busi* 女子星ノ意。織女星。 *bunar' a:* 女子 p125(宮古島平良、伊良部島佐良浜)

・フニブス *funi-busi* 船星ノ意。北斗星。 p184 (宮古島平良、上地)

・ユス°フォーブス ju:zfo:busi 宵の明星（宮古島平良）[沖縄本島、jwbamm ə a:] p314

・ナガズウ°ブス naga 3 u:busi 彗星 p568（宮古島平良）

・ニーヌパ°ブス ni:nupa-busi 「子ノ方星」ノ意。北極星。p617（宮古島平良、伊良部島佐和田、伊良部島長浜）

『宮古方言ノート下』には次のような星名が記されている。（ネフスキー2005b）

・ポーキ°ブス po:k^si-busi 「箒星」ノ意。彗星。p93（宮古島平良）

・プスガマ pusi-gama 小星 p115（宮古島平良、伊良部島長浜）

・シャーカアガラー sa:ka-agar' a: 暁の明星 p135（宮古島平良）

・ウシムマピ°キブス usi-mma-p^sik^si-busi 「牛馬引星」ノ意。牽牛星。p376（宮古島上地）

・ウフニ°ブス uhu:nibusi 北斗 uhu:ni: 大船 p430（伊良部島佐良浜）

・ウプラウ°サギ upura-usagi 明けの明星 upura: 大浦。平良村ノ大字。p481（宮古島平良）

ii) トーガニ

ネフスキーは、1922年8月6日、伊良部島の村役場で伊良部島長浜生まれの垣花(カチヌパナ)氏より即興歌「トーガニ」を記録。

「なつい ふゆ かわらん にぬばぬ ぶすいがま ユー ふむ
らだ ていりうり

にぬばぶすいがま ヨー つづあや みやーぎどう ぶすいが
まや ながみどう くらさでい びやーむ ヨー」

(夏も冬も変わらない、子の方の星<北極星>よ。曇らずに照っている、子の方の星<北極星>よ。あなたを見上げて、星を眺めて、暮らしたいものだ。)(ネフスキー1998)

「がま」は小さいという意味で2等星の北極星は小さくて愛しいと親しみを込めて「にぬばぶすいがま」(子の方の小星)と呼んでいた。

iii) アーグ

伝承地は不明であるが、ネフスキーは、「むてやー
がーらぬあーぐ」を記録している。

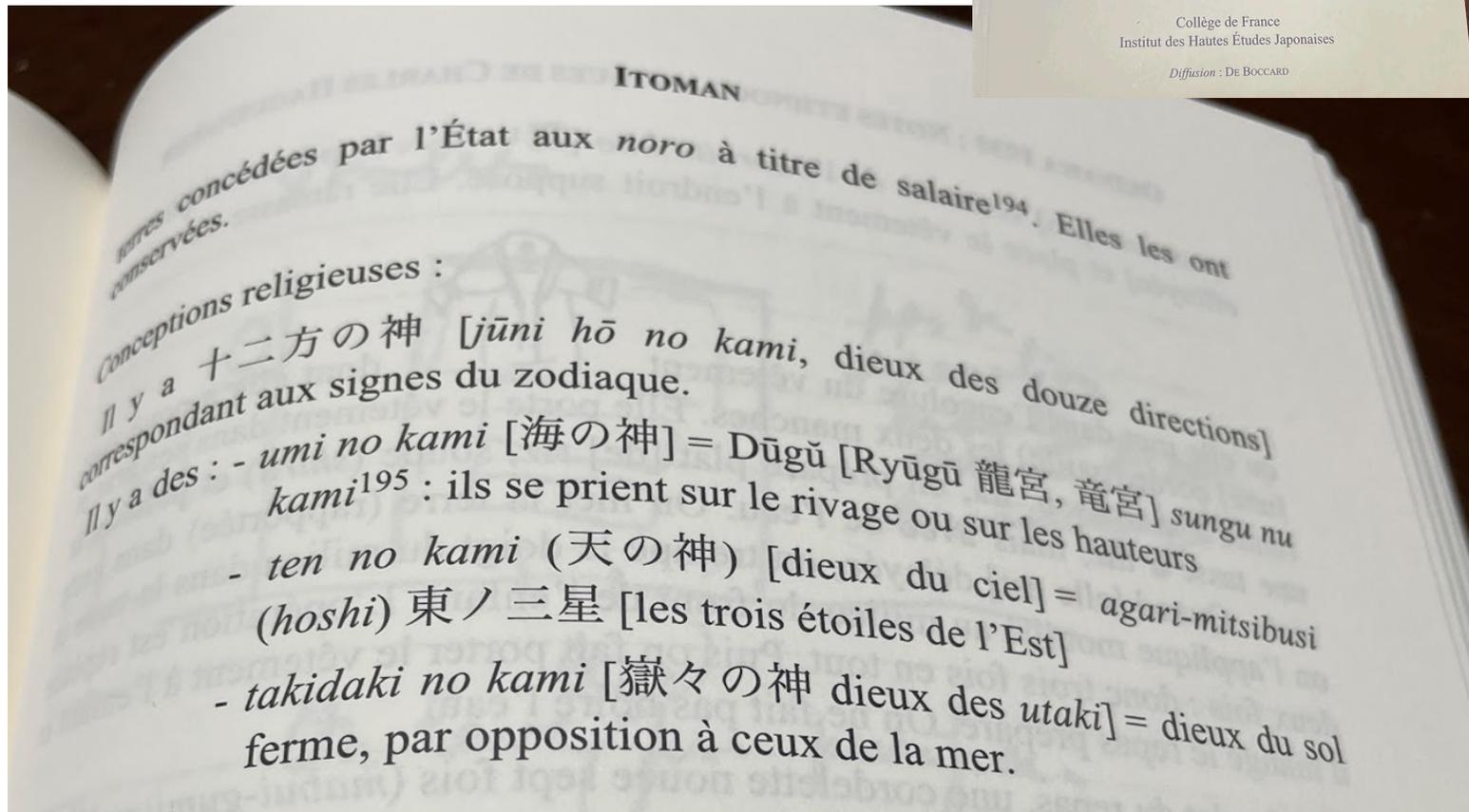
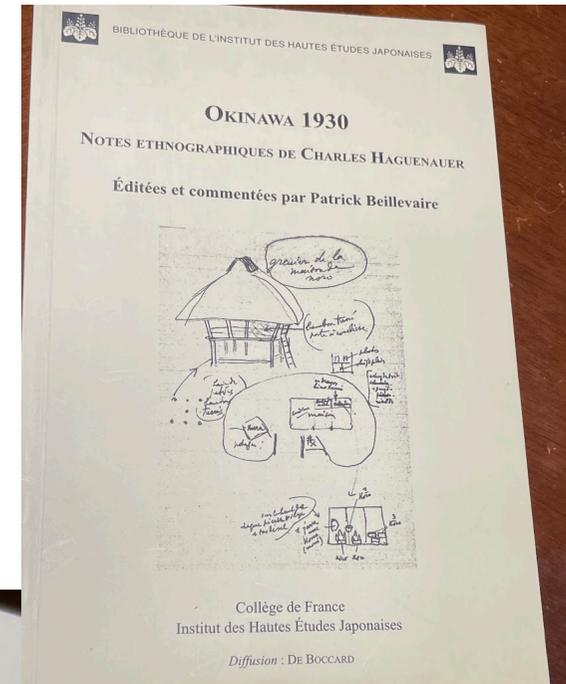
「にぬぱぶすい ぴいていつい なり なやぶすい」

(北極星は ひとつで輝く星である。)

「むてやーがーらや みやーくとうなぎ なやびい
とう」

(ムチャーガーラは 宮古中で輝く人である。)(ネ
フスキー1998)

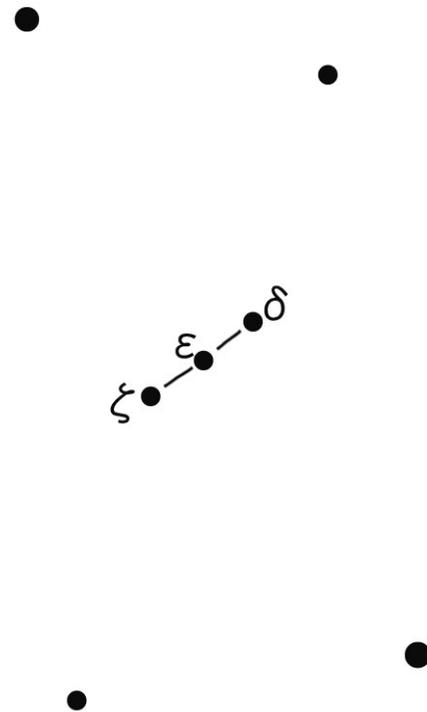
(2) フランス人言語学者シャルル・アグノエルは、昭和5年(1930年)に沖縄県糸満市を訪れ、アガリミチブシという星名を記録した。



ten no kami(天の神)[dieux
du ciel]=agari-mitsibusi
(hoshi)東ノ三星[les trois
etoiles de l'Eest]

(Patick Beillevaire:2010, OKINAWA1930
NOTES EHENOGRAPHIQUES DE
GHARLES HAGUENAUER,p.69。)

アガリは、「上がる」という意味
ではなく、「東」という意味である。
アガリミチブシはオリオン座の
三つ星(オリオン座 δ 、 ε 、 ζ)
を意味する。



4. 黎明期に記録された星名伝承の現在

(1)現在においても伝承されているニコライ・A・ネフスキーの記録した星名と「トーガニ」「アーク」

i) 星名

約100年前にネフスキーが記録した星名が現在においてどのように伝承されているか、次に記す。「北尾C」は北尾による現地調査。「北尾AC」は、北尾によるアンケート調査による記録。

◎フニブス(北斗)

- ・宮古郡上野村字宮國(現 宮古島市)

フニブス: 漁船や航海中、船員たちが見当にすると云うことから船星と伝えられている。(1983年記録、話者名: 平良恵勇氏、当時69歳)(北尾AC)

- ・平良市松原(現 宮古島市)

フニブス: 舟星(1984年記録、話者: 松原の老人クラブ)(北尾AC)

- ・宮古郡城辺町保良(現 宮古島市)

フニブス(1984年記録、話者名: 下地金吉氏、当時71歳)(北尾AC)

◎ウシムマピキブス(牽牛)

・宮古郡上野村字宮國(現 宮古島市)

ウシウマピキブス:陰暦7月7日七夕の夜、天の川をへだてている織女星と牽牛星が年に一度川を渡って会うという伝え話がある。(1983年記録、話者名:平良恵勇氏、当時69歳)(北尾AC)

・平良市松原(現 宮古島市)

ウスウマサダティブス:牛と馬を連れている星。「サダティ」とは、「連れる」の意。(1984年記録、話者:松原の老人クラブ)(北尾AC)

◎ウプラウサギ

・平良市松原(現 宮古島市)

ウプラウサギ(1984年記録、話者:松原の老人クラブ)
(北尾AC)

現地調査で次のように記録した。

「ウプラウサギ、ゆーあき(夜明け)や。池間島いけばよくわかるのとちがうか。夜明け3時か4時に出る」

「ウプラウサギ、東側にアガス°に出る。東のほうに夜明けに見える。相当、光る星。アガス°に出る」

(2019年記録、話者生年:昭和5年、宮古島市松原出身)(北尾C)

ii) トーガニ

①伊良部村史に北極星が唄われている「伊良部タオガニ」が掲載されている。

「ナツフユカワラヌ ニノパノポスガマヨ フモリティヤニヤーン ピテツ、ボスガマヨ

ヴァトヨ、バントマイ ピトツボスニヤーン ド ツムヌカワリティヤ アラデンマーンヨ」

(夏冬変わらない 北の星よ(北極星) 曇ることのない 一つ星よ

君と僕は 一つ星の如く 心がわりが あってなろうか)(伊良部村史編纂委員会1978)

ii) トーガニ

②城辺福里の上田長福氏(大正3年生まれ)による「ナ
つフユ カーラン」に「ニヌパヌプス」が唄

われている。以下、『城辺町史 第6巻歌謡編』より引用する。

「ナつフユウ ヲカーラン ニヌパヌ プスガマヨー クムラダ
ティリー ウい ニヌパヌ プスガマヨーイー うヴァヤ ミヤ
ギドウ サカイヤ イカヨー」[ひらがな表記は中舌音]

(夏も 冬も 位置の 変わらない 子の 方の 小星よ
曇らず 照り輝いて いる 子の 方の 小星よ あなたを
見上げて カナシャを 見上げて 栄えて icago)

(城辺町史編纂委員会2000)

ネフスキーの記録と同様、夏も冬も一年中位置が変わらず同じところに輝く北極星を唄っている。そして、次の項では、自分の信じる人、愛する人と重ね合わせて多様性豊かな表現で唄われている。

・ネフスキー記録のトーガニ:「あなたを見上げて、星を眺めて、暮らしたいものだ」

・伊良部タオガニ:「君と僕は、一つ星の如く心がわりがあってなろうか」

・ナツフユ カーラン:「あなたを見上げて、カナシャ(愛おしい人)を見上げて、栄えていこう」

iii) アヤゴ(アーグ)

『平良市史第七巻資料編5、民俗・歌謡』に、ムティアガラというニヌパブスが唄われた長アーグ(長くひっぱってうたう歌)が掲載されている。

「ティン ナームヌヨー ニヌパブスー ピトウヌ ナームヌヨー ムティアガラヨー」

(天(星)で 名高いのは ヨー(調子を整える語) 北極星 人で名高い者は ムティアガラ(人名))(平良市史編さん委員会1987)

(2) シャルル・アグノエルの記録したアガリミチブシへの祈りの現在

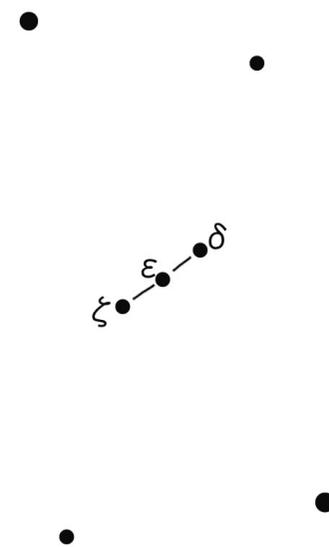
アガリミチブシは、糸満の漁師が使用している星名ではない。

筆者(北尾)はミチブシ、ミィチィブシを記録した。

アガリミチブシと「アガリ」をつけないかと確認すると「つけない」という答えが返ってきた。

金城誠氏は、ミーチブシ、クガニミチブシ、タテーブシを記録している。金城誠氏は、「夏の漁の時、この星の出現や高さから夜が明けるまでの時間を判断している。また、この星はま東から出て、ま西に沈むので洋上の方位を知るあて星としても使える。そのためか、この星を『重んじられている星だからクガニミチブシとよぶ』の話も今回得た」と記している。

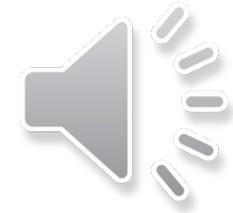
金城誠：1986,星の方言名一糸満市
字糸満一,やちむん第9号,
やちむん会, p.47-53。



漁師にとって生活に必要な星であるが、アガリミチブシの名前が用いられることはなかった。

現在はノロが不在になり行なわれていないが、旧暦5月1日の朔日拝み(チータチウガミ)において次のようにアガリミチブシという名前が用いられていた。

「アガリミチブシ ニーヌファ ウマヌファ ヌ グエーサチ
ダヤビル」(東り三星 子の端 午の端 の お声がけで
あります)



「ミティン サンティン ルーグシン トゥヌ グエーサチ
ダヤビル」(御天 山巔 竜宮神 との ごあいさつ であ
ります)

「アガリミチブシ ニーヌファ ンマヌファ ヌ グエーサ
チ ダヤビル」(東三つ星 子の端 午の端 の ございさ
つ であります)(金城善氏による祈りの記録)

大里字誌編集委員会：2009, 大里字誌, 糸満市大里公
民館, p681-687。

山巔毛には、南山王国最後の王、他魯毎(たるみい)の墓がある。そして、その墓のある山巔毛から見ると、南山城跡の方からのぼるのがアガリミチブシ(オリオン座三つ星)である。これは間違いない事実である。

山巔毛から南側は埋め立てられてしまっているが、かつては海であった。海に向けそびえ、南山城跡からアガリミチブシをのぼる景観のなかでアガリミチブシへの祈りが続いていた。

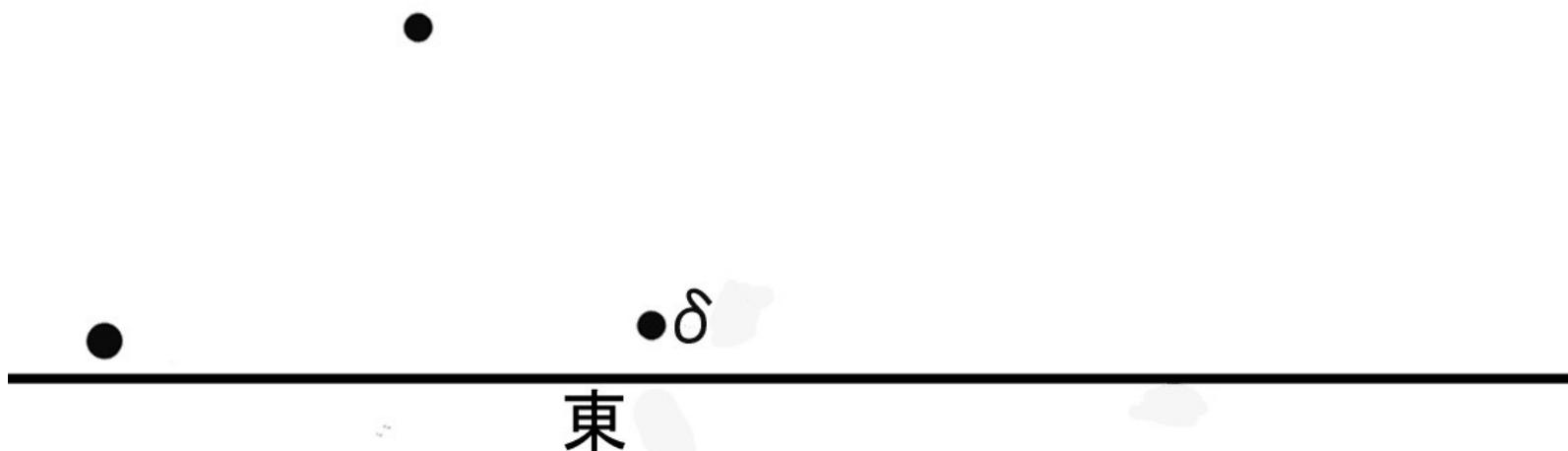
「筆者は、南山王統の三代の王たちが空に昇っていくのを拝んでいるのではないかと考えるが、アグノエル博士は『東ノ三星』は天の神であると、糸満ノ口から聴いている」

金城善：2014,フランス人東洋学者シャルル・アグノエルが訪ねた昭和五年の糸満町,沖繩民俗研究第33号,沖繩民俗学会, p45-47

アガリミチブシは、 δ 星、 ε 星、 ζ 星の順で縦になって出る。最初にのぼる δ 星は初代の王、その次の ε 星は二代、 ζ は三代…と、三人の南山王を想像したのであるうか。

アガリミチブシになった三人の南山王

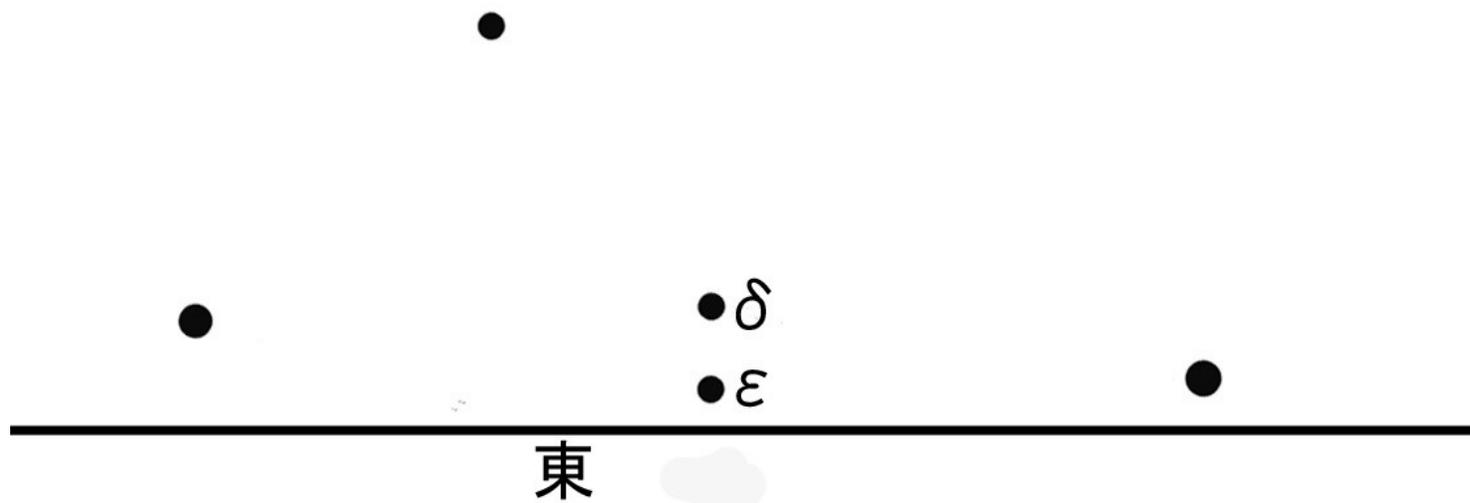
オリオン座 δ (デルタ) 初代が最初にのぼる



アガリミチブシは、 δ 星、 ε 星、 ζ 星の順で縦になって出る。最初にのぼる δ 星は初代の王、その次の ε 星は二代、 ζ は三代…と、三人の南山王を想像したのであるうか。

アガリミチブシになった三人の南山王

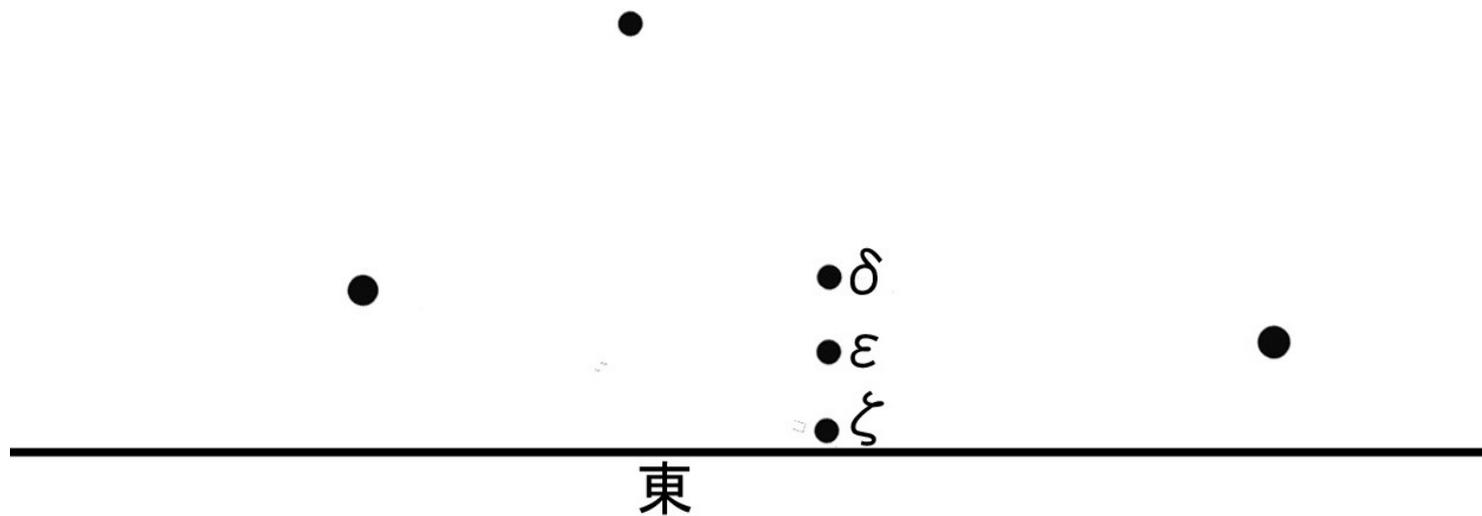
オリオン座 ε (エプシロン) 二代がのぼる

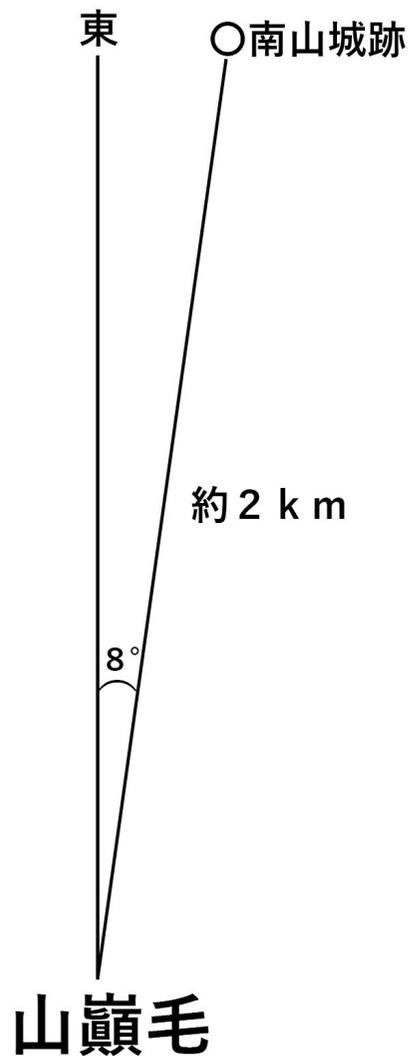


アガリミチブシは、 δ 星、 ε 星、 ζ 星の順で縦になって出る。最初にのぼる δ 星は初代の王、その次の ε 星は二代、 ζ は三代…と、三人の南山王を想像したのであるうか。

アガリミチブシになった三人の南山王

オリオン座 ζ (ゼータ) 三代がのぼる



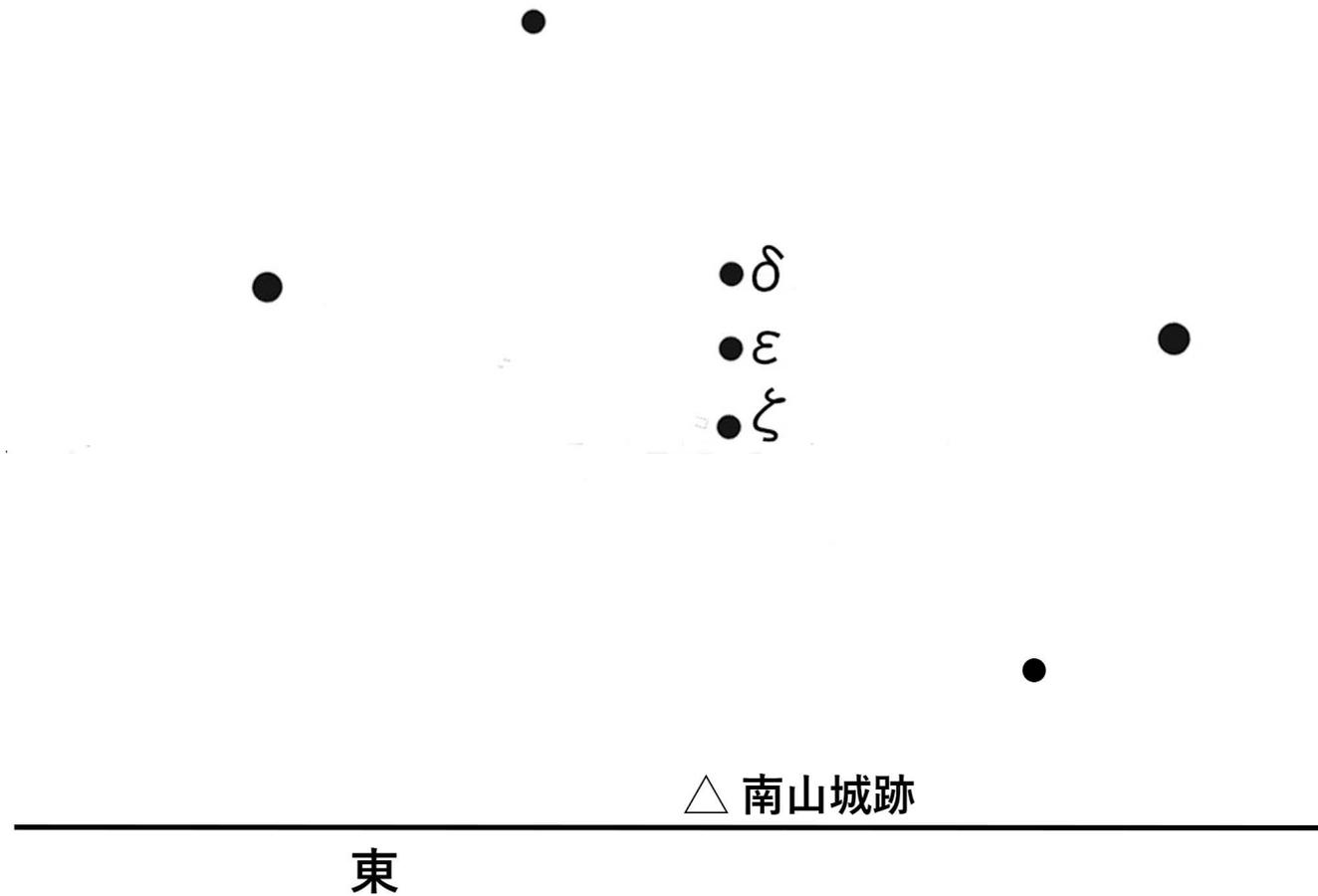


友利健氏によると、山巔毛と南山城跡を結ぶ線を入れた地形図を作成したところ距離は約2キロ東から南の方に約8度にあたる。

ちょうどオリオン座と星が高度約11度になったとき、山巔毛から南山城跡の方角に輝く。(1900年、糸満市の場合)

アガリミチブシになった三人の南山王

オリオン座ζ（ゼータ）高度約11度、南山城跡の上に輝く



アガリミチブシへの祈りが行なわれる旧暦5月4日(ユッカヌヒー)にオリオン座三つ星がのぼる様子を見るができない。

太陽の横の方にあるのを拝んだ可能性がある。神役の玉城氏はアガリミチブシでなくミウミサマに祈りを捧げていたが、星ではなくウティン(太陽)であった。

1429年6月5日午前6時35分

太陽の右のほうにはオリオン三つ星

● 太陽

●
● アガリミチブシ
●

東北東

東

東南東

● 太陽

●
● アガリミチブシ
●

東北東

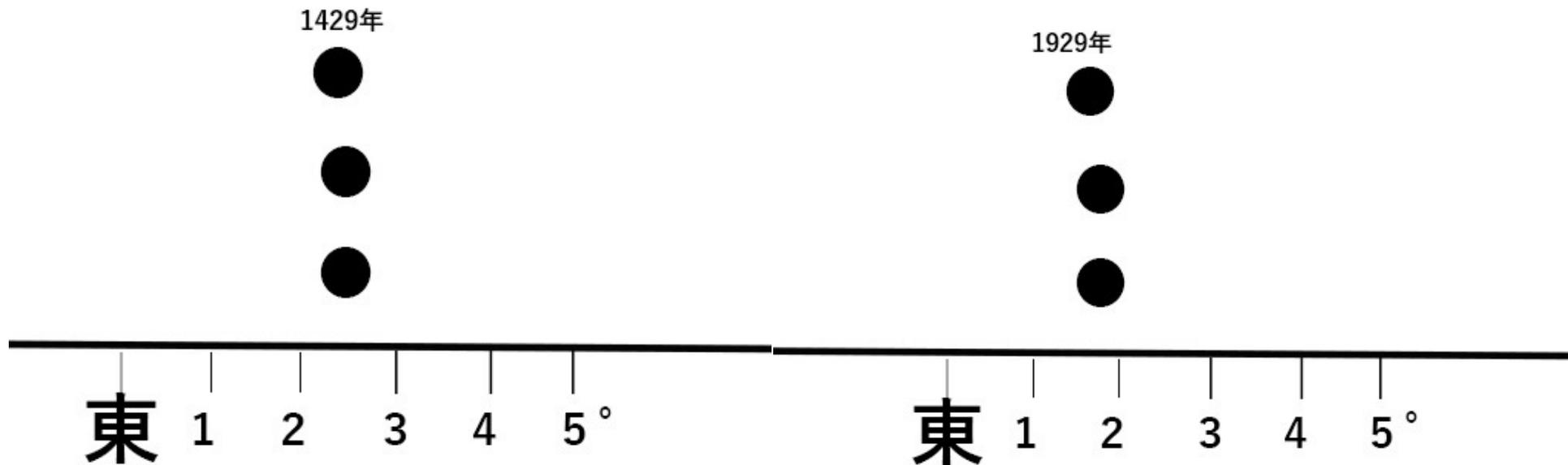
東

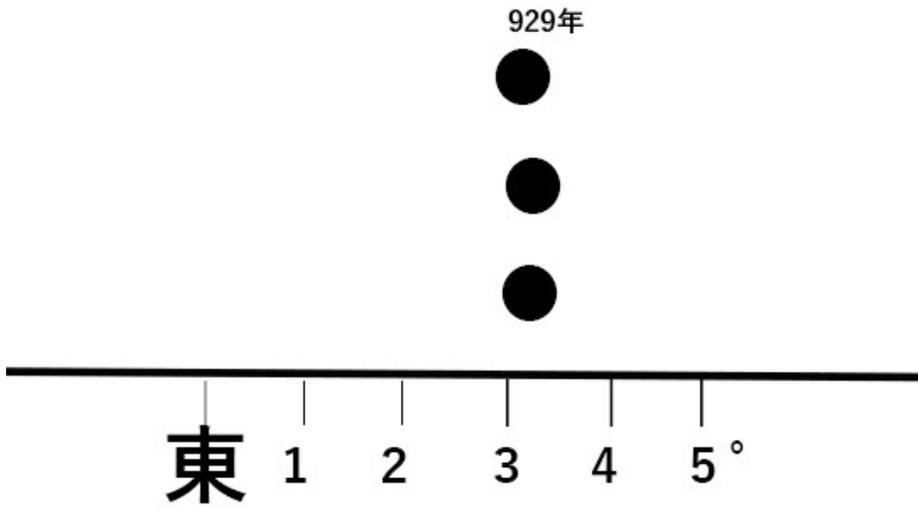
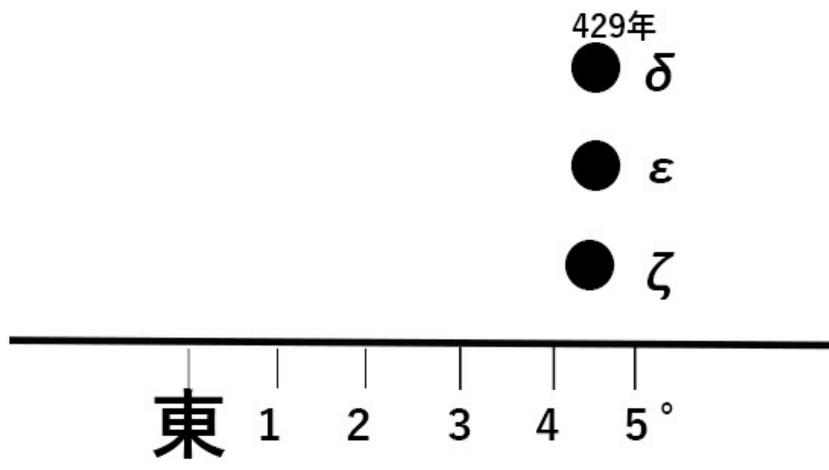
東南東

1629年6月24日 午前6時7分、日の出30分後 沖縄県糸満市

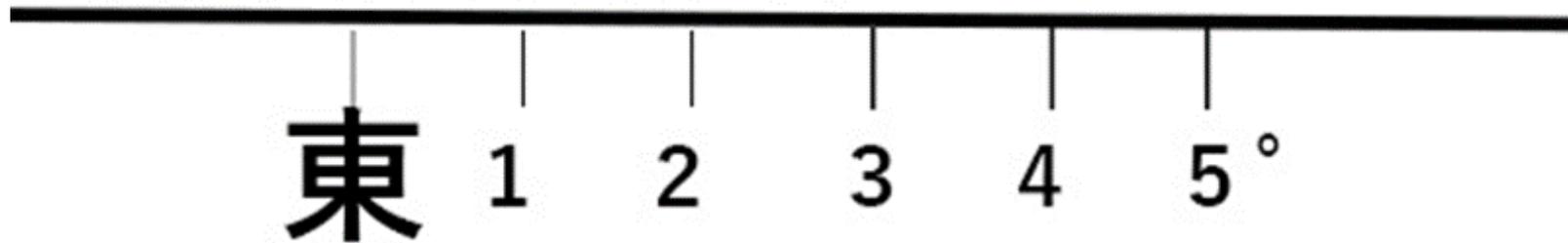
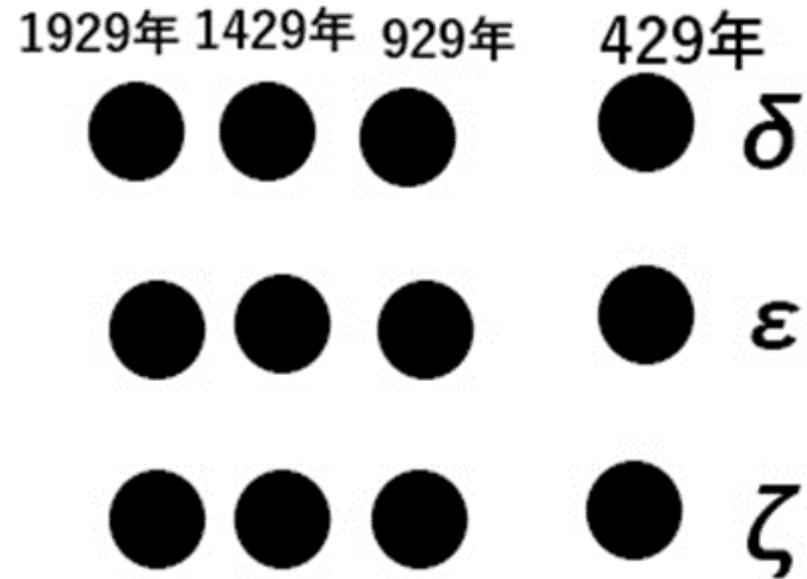


オリオン座三つ星は、ほぼ東からのぼる。オリオン三つ星(一番下の ζ 星)は、時代をさかのぼるにつれて東よりさらに南のほうからのぼる。1429年においては、 ζ 星は約 2.4° 東より南から、 ε 星は約 1.6° 東より南から、 δ 星は約 0.7° 東より南からのぼる。現在においては、 ζ 星は、東より約 1.8° 南から、 δ 星は、ほぼ東よりのぼる。





オリオン座三つ星は、真東より南からのぼる。



したがって、アガリミチブシの香炉は、①ウヌファ(卯の方)(東)の香炉よりも南に設置されなければならない。

ところが、②すなわち北に設置されてしまった。



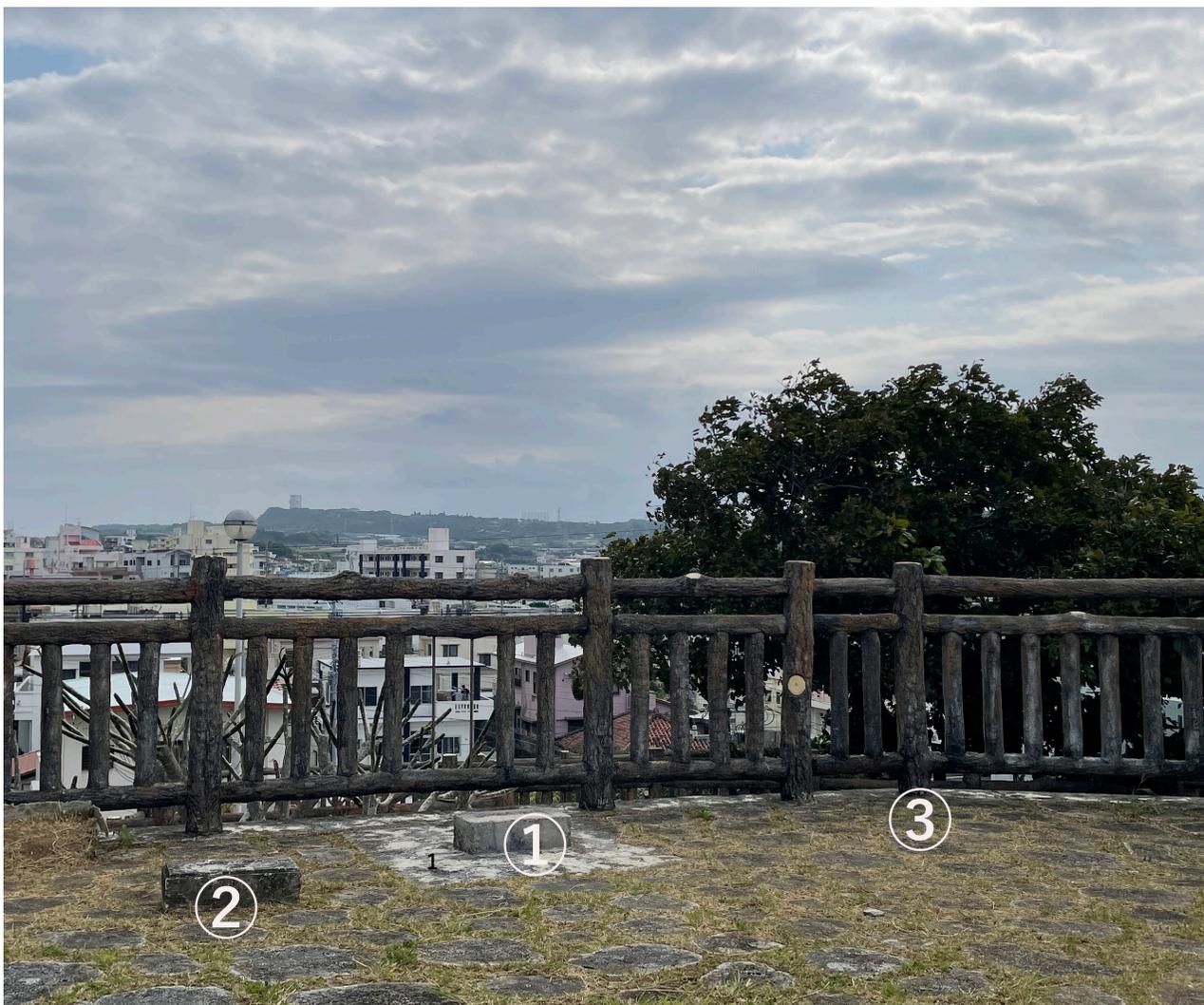
アガリミチブシ(オリオン座三つ星)が、東よりも南側からのぼるという認識があった。元沖縄タイムス社のカメラマンの大城弘明氏が撮影された1986年6月10日のハーレーの取材の写真にアガリミチブシへ12本の3組の沖縄線香が供えられているのが写っている。



線香のあった場所は、北尾が指さしている付近である。

これは卯の端の香炉よりも南であり、アガリミチブシが東より南側からのぼり高度をあげていくという認識があったことを教えてくれる。





アガリミチブシの香炉が後に②に設置された。卯の端の香炉①の南側③付近に設置されるべきなのが、北側②に設置されてしまった。これは、東より南側からのぼるアガリミチブシへの認識と矛盾するものであった。

神役の玉城氏は本来ならアガリミチブシの祈る場所に近い①(卯の端の香炉)をアガリミチブシの香炉と判断して祈りを捧げていた。そして、②(アガリミチブシの香炉)を卯の端の香炉と判断して最後に祈った。そのことによって、アガリミチブシは東より南であるという認識と矛盾が生じなかったのではなかろうか。



糸満市山巔毛では、コロナ禍のため、2020年～2022年は儀式のみで、ハーレーは実施されなかった。

2023年6月21日、4年ぶりに完全な形で実施された。

・午前8時を過ぎると、
門中の人々がビンシー
を持って祈りに来られ
る。



卯の端の香炉

(アガリミチブシの香炉として祈る準備。神役、玉城さんと門中の人による祈り)

(午前9時頃、神役が到着。9時11分、最初の香炉を拝む準備)



福州の緯度も糸満市の緯度も約26.1度である。福州市—山巔毛—南山城跡は、ほぼ同じ緯度になる。アガリミチブシは東より少し南よりのぼるので若干ずれているが、ほぼ東からのぼる星のなかで最も目立つ。この東西の線は意味があるのであろうか。今後の課題としたい。



多良間のニーリ

ユシャスミヤ(秋の四辺形)

『宮古島旧記並史歌集解』には、秋の四辺形、プレアデス、ヒアデス星団とアルデバランでつくるV字形、オリオン三つ星～と順にのぼるのを見て蘇って与那覇勢頭(よなはせど)豊見親(とうゆみや)になって宮古を治めることになったというニーリ(神歌)が掲載されている。

(稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』琉球文教図書、1962、p.393-401。)

ユシャスミヤ、ユツアシキ(秋の四辺形)

「寅の方ゆ見いりば

あがるなゆ、見いりば、(寅の方則ち東を見ているとの意)

ゆしやすみやーや、

きんたてい、うりが

あとからや、」

稲村賢敷氏は、「『ゆしやすみや』はペガス星座(ママ)のこと、『ゆしやす』は島語で屋敷のこと、ペガス星座(ママ)の四つ星を指す、『きんたて』は四隅の柱を立て、家建てすること、即ちペガス星座の四ツ星を見て、その後からはの意」と記している。厳密に言えば、ペガス座 β α γ アンドロメダ座 α でつくる秋の四辺形を意味する。

波照間島の「ひーすくり・じらば」に唄われている「ユツアシキ」も秋の四辺形であり、家建てという共通点がみられる。

「ひーすくり・じらば

その一 ゆつあしキ・じらば

原歌 訳

ゆつあしキてそ一 四辺形星を

やーなうーばし 元にして

やーばちくーり 家を造った

あんちよー そうな

ウリヤミョーナチャ 囃子(それは 冥加なことよ)」

(玉城功一「ひーすくり・じらば」竹富町古謡編集委員会『竹富町古謡集 第三集』竹富町教育委員会、2000、p.306。)

多良間のニーリ「ユシヤス」

多良間の星見様「大ヨサシ」

波照間「ユツァシキ」

同じグループの星名ではなかろうか。

多良間島のニーリに歌われている星—ンミブス、ムイブス、タ
タキ°、ウプラクーラ

秋の四辺形の次にのぼる星「んみ星」を歌う。

「んみ星(ぶす)ばあがらし

うりがあとからや」

2022年10月多良間島にて「ム°ミブス」を記録しており、「ンミ
ブス」は現在においても記録できるプレアデス星団(昴)を意味
する星名である。

秋の四辺形のペガサス座 γ の出からプレアデス星団(おうし
座 η)の出まで約3時間13分(1900年、宮古島の場合)である。

プレアデス星団の次にのぼる星について唄われている。

「むい星(ぶす)ばあがらし

多良間島の星見様に箕(ムイ)星が掲載されており、アルデバランとヒアデス星団でつくるV字形を意味する。

プレアデス星団(おうし座 η)の出からアルデバランの出まで約1時間8分を「うりがあとからや」と唄った。

むい星に続いてのぼる星を次のように唄った。

「たーきゆみや上らし

うりがあとからや」

アルデバランの出とオリオン座三つ星の出は約1時間40分の
間隔で、「うりがあとからや」の表現にぴったりである。

- ・2021年多良間島塩川にてタタキ[°]を記録。
- ・多良間島出身の渡久山春英氏が宮古毎日新聞2017年4月
27日に、「オリオン座の三ツ星は『タタキ[°] 』」
- ・『南琉球宮古語多良間方言辞典』の記述

たたき[°] [tatakɪ] [名]オリオン座の三つ星(渡久山他 2020)



秋の四辺形

○プレアデス星団

ぎよしゃ

アルデバランとヒアデス星団

オリオン座三つ星
東

秋の四辺形
(ペガサス座
 γ)がのぼっ
てからプレア
デス星団、ア
ルデバランとヒ
アデス星団で
つくるV字形、
そして、オリオ
ン座三つ星ま
での約6時間
の星の出を
唄った。

最後に出る星：ウプラクーラ

「うぷらくーら、あがらし、
うりがあとからや」

稲村氏は、「『うぷらくーら』又『うぷらうさぎ』は明けの明星のこと、語彙は不明。明けの明星と解釈していた。

ところが…

明けの明星は常に出るわけではない。

宵の明星のときもある。



ウプラクーラ
ウプラ=シリウス
クーラ=プロキオン



多良間のニーリに唄 われる星名	稲村賢敷氏	北尾・友利
ゆしやすみや	ペガス星座 (ママ)	ペガサス座 β α γ ア ンドロメダ座 α でつ くる秋の四辺形
んみ星 (ぶす)	スバル星群 (プレア デス星団)	プレアデス星団
むい星 (ぶす)	駟者座星群	アルデバランとヒア デス星団でつくるV 字形
たゝきゆみや	星は不明	オリオン座三つ星
うぶらくーら	明けの明星	うぶら (シリウス)、 くーら (プロキオン)



寅のほう見いりば あがるなゆ、見いりば、
ゆしやすみやーや、きんたてい、うりがあとからや、
んみ星(ぶす)ばあがらし うりがあとからや
むい星(ぶす)ばあがらし うりがあとからや
たーきゆみや上らし うりがあとからや
うぶらくーら、あがらし、うりがあとからや

(多良間村塩川、浜川春子さん(昭和16年生まれ)による。

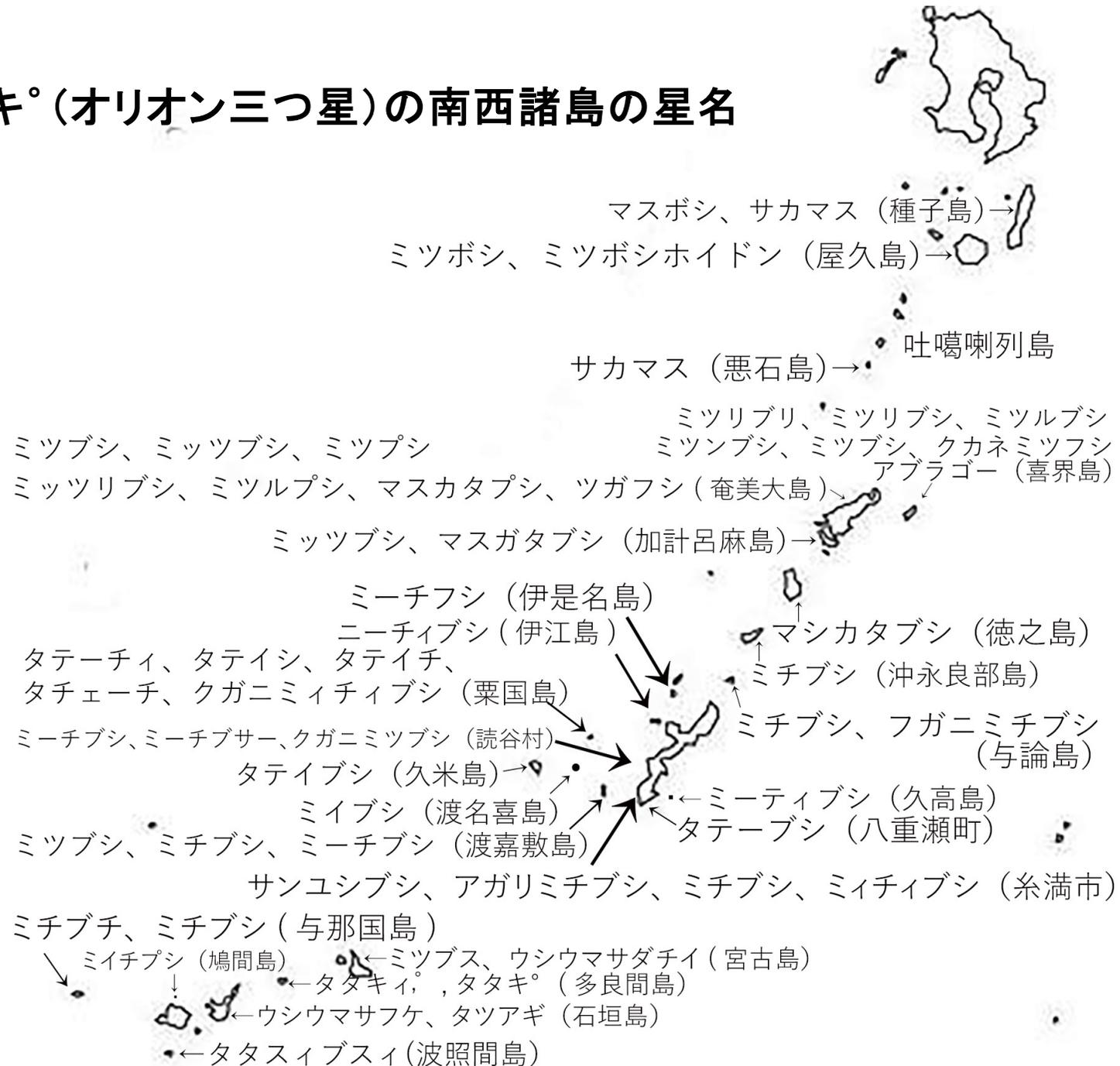
2022年10月)

6 多良間の ニ一りに唄われ る星名ンミブス (プレアデス星 団)、タタキ°(オ リオン三つ星)の 南西諸島の星名

(1)ンミブス(プ レアデス星団) の南西諸島の 星名



(2) タタキ° (オリオン三つ星) の南西諸島の星名

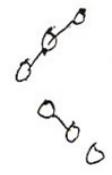


多良間の星見様のオリオン



夕夕キ星ノコト

此ノ星マイレ星ヨリニ十五日ニアカリ寒路ヨリ七十三日アタリ同向西風コレアリキ矣
 必^ラ冬月八日ノ前右ニナイアタリ申矣



立明星ノコト

夕夕キ

一、同十日頃日入時分ヨリ五六日ノ間

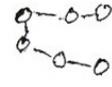
立明星卯辰ノ間ヨリ出ル時分右星

ヒルマノ時分大雨降り折竹節ニキ矣

二月子日ノ頃ヨリハ風巡リ強イ時分ニテ

海上念遣ニキ矣

フでいれり



立明星ノコト

一、十月五日頃ヨリ同十日ノ間日入時分右星

卯方ヨリ出ル時ハ小雨降時分ニテ

仲粟苗入~~中~~中ニテ風子丑ノ間モトニテ

海上心安ク之アリキ矣

星見様について、黒島為一氏は、次のように指摘。

「おそらく那覇あたりから久米島へ、那覇あたりから宮古島を經由して多良間島へ、さらには石垣島を經由して波照間島へ伝えられたのではなかろうか」

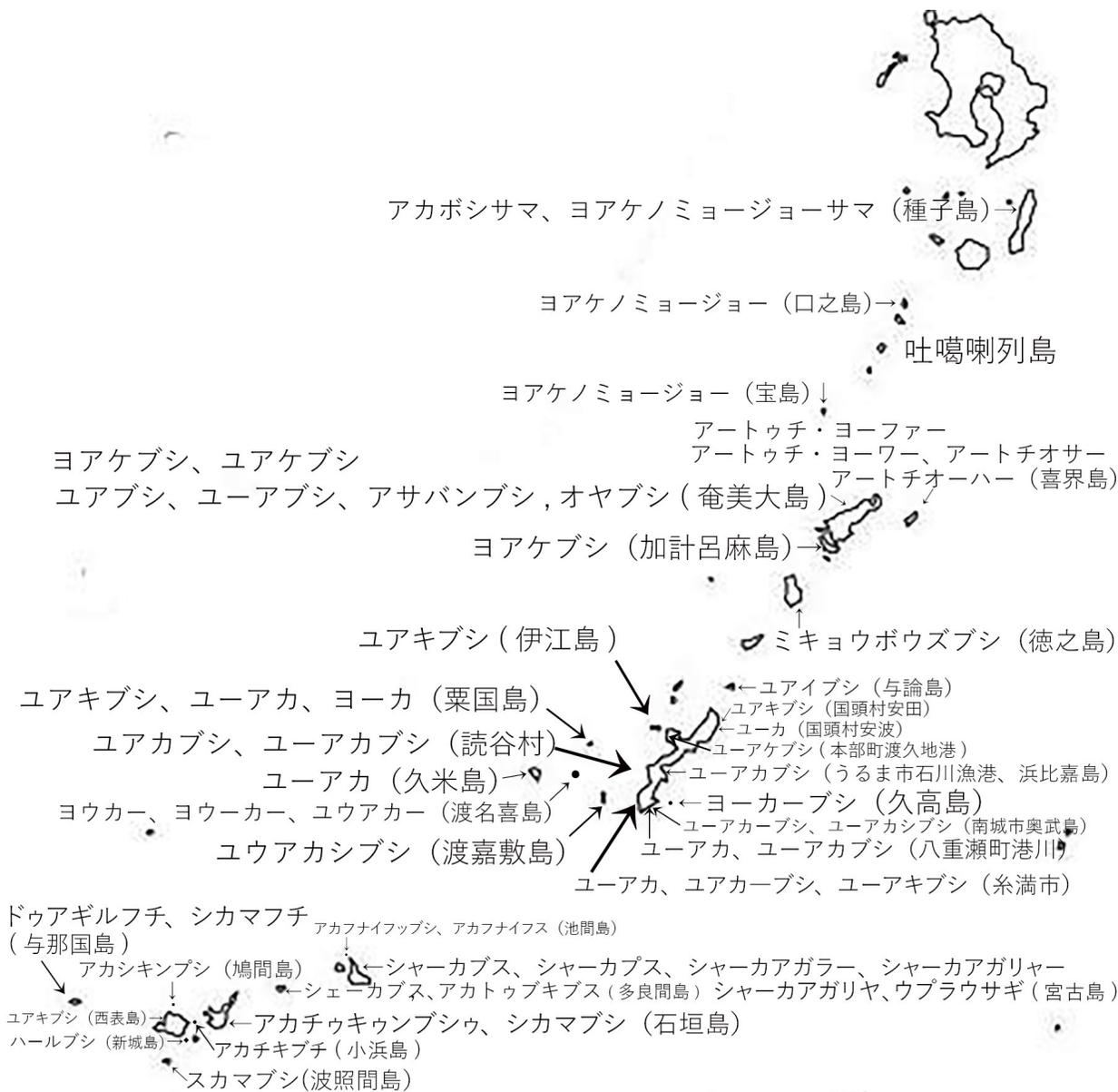
黒島為一「『星圖』『天気見様之事』『星見様（仮題）』」『八重山博物館紀要第16・17号』八重山博物館、1999、pp. 38-41。

多良間の星見様の特徴として、地域で使われている星名が追記されている 例 タタキ星

(1) 高城隆・星加弘文「『星見様』の研究(上) -沖縄・多良間島の星伝承-」『沖縄文化53』沖縄文化協会、1980、pp. 41-52。

(2) 高城隆・星加弘文「『星見様』の研究(下) -沖縄・多良間島の星伝承-」『沖縄文54』沖縄文化協会、1980、pp. 71-93。

7 多良間の
 ニーリに唄わ
 れる星名ウプ
 ラクーラを、稲
 村賢敷氏はウ
 プラウサギと
 同様明けの明
 星と考えたが
 明けの明星に
 はウプラクー
 ラは分布して
 いない

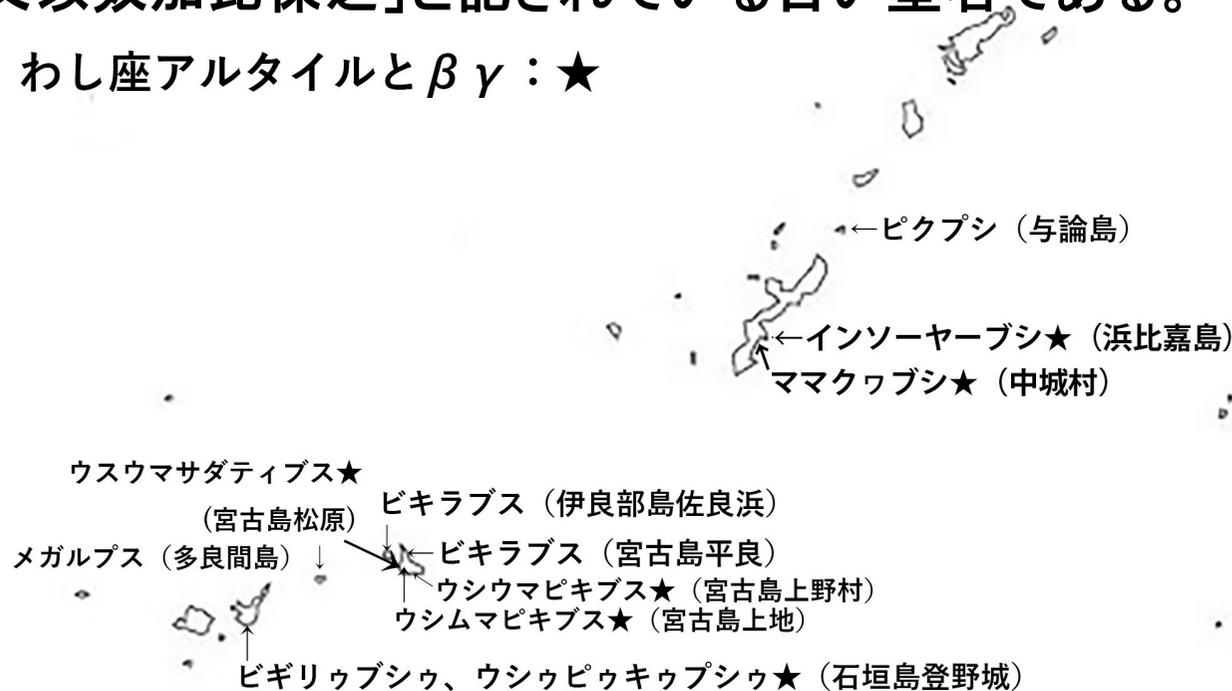


8 わし座アルタイル、アルタイルと β γ の星名

◎インソーヤーブシ(犬伴星)(わし座アルタイルと β γ)

沖縄県うるま市浜比嘉島浜に伝えられている。インは「犬」、ソーヤは「連れていく」という意味。九州に伝えられている犬飼星が沖縄にインソーヤーブシとして伝えられている。犬飼星は、平安時代中期の辞書である源順著『倭名類聚抄 天部第一』に、「牽牛 和名比古保之又以奴加比保之」と記されている古い星名である。

わし座アルタイルと β γ ：★



9 おわりにー今後の課題

星は、暮らしの様々な場面とかかわりがあった。生業、信仰、年中行事それぞれに多様で豊かなかかわりがあった。そして、星が語られ、唄われた。それらは、古代から連続した営みであった。いま、シニグや綱引きと星とのかかわりについて調査を進めている。様々な切り口から星と人のかかわりを考えていくことを今後の課題としたい。

また、奄美・喜界島以南にはスマル・スバルのグループの星名は分布しない。しかし、宮古島にスマルという言葉は現在においても使われている。星名としてではなく、束ねる意に使われている。これからも、沖縄・奄美の星名を調査研究を通して、日本列島全体の星について考えていきたい。

調査にあたって、波照間島については島村修氏、新城勝氏、与那国島については、田原伊明氏、上地艶子氏、宮古島については宮川耕次氏、多良間島については多良間市教育委員会の桃原薫氏の貴重なアドバイスをいただいた。2019年の宮古島、与那国島等の調査に同行いただいた宮地竹史氏、2020年の波照間島等の調査に同行いただいた通事安夫氏、与論島の調査に同行いただいた澤田幸輝氏、沖縄本島、粟国島、久高島、浜比嘉島等の調査に同行いただいた友利健氏、福里美奈子氏、そして、星名伝承を語ってくださった話者のひとりひとりに感謝の意を表します。

引用文献

岩倉1941…岩倉市郎『喜界島方言集』中央公論社、1941、pp.250-251。

稲村1962…稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』琉球文教図書、1962、pp.393-401。pp.431-432。

喜舎場1970a…喜舎場永珣『八重山古謡 上巻』沖縄タイムス社、1970、p.51。

野尻1973…野尻抱影『日本星名辞典』東京堂出版、1973、pp.184-188。

伊良部村史編纂委員会1978…伊良部村史編纂委員会『伊良部村史』伊良部村役場、1978、p.1481。

高城他1980a…高城隆、星加弘文「『星見様』の研究(上)」『沖縄文化53』沖縄文化協会、pp.41-52。

高城他1980b…高城隆、星加弘文「『星見様』の研究(下)」『沖繩文化54』沖繩文化協会、pp.71-93。

松山1984…徳之島町の松山光秀氏から1984年に提供を受けた資料

金城誠1984…金城誠「浜・比嘉で拾った星の方言名」『やちむん第8号』やちむん会、1984、pp.62-69。

金城誠1986…金城誠「星の方言名-糸満市字糸満-」『やちむん第9号』やちむん会、1986、pp.47-53。

平良市史編さん委員会1987…平良市史編さん委員会『平良市史第七巻資料編5 民俗・歌謡』平良市教育委員会、1987、p.620。

ネフスキー1998…ニコライ・A・ネフスキー『宮古のフォークロア』砂子屋書房、1998、pp.190-191。pp.272-273。

黒島1999…黒島為一「『星圖』『天気見様之事』『星見様(仮題)』」『八重山博物館紀要第16・17号』八重山博物館、1999、pp.38-41。

玉城2000…玉城功一「ひーすくり・じらば」竹富町古謡編集委員会『竹富町古謡集 第三集』竹富町教育委員会、2000、p.306。

城辺町史編纂委員会2000…城辺町史編纂委員会『城辺町史 第6巻歌謡編』2000、p.166。

宮城2003…宮城信男『石垣方言辞典 本文編』沖縄タイムス社、2003、p.16。

ネフスキー2005a…ニコライ・A・ネフスキー著、平良市教育委員会編『宮古方言ノート上』、平良市教育委員会、2005、p.113、p.125、p.184、p.314、p.568、p.617

ネフスキー2005b…ニコライ・A・ネフスキー著、平良市教育委員会編『宮古方言ノート下』、平良市教育委員会、2005、p.93、p.115、p.135、p.376、p.430、p.481。

大里字誌編集委員会2009…大里字誌編集委員会『大里字誌』糸満市大里公民館、pp.681-687。

Patick Beillevai2010…Patick Beillevaire, OKINAWA1930
NOTES EHENOGRAPHIQUES DE GHARLES
HAGUENAUER,p.69。

金城善2014…金城善「フランス人東洋学者シャルル・アグノエルが訪ねた昭和五年の糸満町」『沖縄民俗研究第33号』沖縄民俗学会、2014、pp .25-49。

北尾2018…北尾浩一『日本の星名事典』原書房、2018、
pp.17-18。p.92。

奥武方言編集委員会2019…奥武方言編集委員会『奥武方言』奥武区自治会、2019、pp.237-247。

渡久山他2020…渡久山春英、セリック・ケナン『南琉球宮古語多良間方言辞典』国立国語研究所、2020、p.36。p.250。

北尾2021…北尾浩一「天文民俗学試論184」『天界2021年3月』東亜天文学会、2021、
pp.81-83。

友利他2023…友利健、北尾浩一「多良間島のニーリに登場するウプラクーラについて」『天界2023年5月』東亜天文学会、2023、pp.168-171。

北尾2023a…北尾浩一「天文民俗学試論189」『天界2023年8月』東亜天文学会、2023、

pp.291-292。

北尾2023b…北尾浩一「天文民俗学試論190」『天界2023年9月』東亜天文学会、2023、

pp.329-330。

北尾2023c…北尾浩一「天文民俗学試論191」『天界2023年11月』東亜天文学会、2023、

pp.407-408。

北尾C…北尾による現地調査

北尾AC…北尾によるアンケート調査

